日本語授業における LMS 上の言語学習活動の分析

―コロナ禍での遠隔授業における実践から見えてきたこと―

深川美帆（金沢大学）

Conducting learning activities in the remote learning setting during the coronavirus disease pandemic: Analysis of learning activities in learning management systems for Japanese language courses

Miho FUKAGAWA, Kanazawa University

要旨：COVID-19 の影響により、日本の大学における留学生向けの日本語授業を、全面的に LMS(Moodle)を用いた遠隔に切り替えた。本発表では言語教育における対面でのインタラクティブな学習活動を２つのタイプの遠隔授業（同期型と非同期型）においてどのように実現したかを、Moodle のログ解析、教師による授業報告、学生へのアンケートをもとに分析・考察した。その結果、Moodle 上の活動モジュールとリソースは、遠隔授業シフト後大幅に増加し、質的にも変化が見られた。アンケートでは、90%以上が遠隔授業での学習を評価していた。一方で、学習者と教師から、遠隔授業における困難点や課題も挙げられた。

キーワード：言語教育、日本語学習、遠隔授業、LMS、Moodle、COVID-19 パンデミック、

1. 背景

2020 年のコロナ禍の中、発表者の勤務する金沢大学では全学の留学生を対象とする日本語プログラムのすべての授業（2020 年春[注1]35 科目、同秋 37 科目）を、従来の対面授業から遠隔授業に全面的に切り替えて教育を行った。対象とする学習者は、日本国内に居住する留学生と、渡日予定だが入国できず海外から授業を履修する留学生（2020 年春のべ 432 名，同秋のべ 349 名）がおり、遠隔授業を実施するにあたり時差とインターネット接続環境の問題があった。このような制約を考慮し、LMS（Moodle）と Web 会議プラットフォーム（Zoom）を活用して授業を実施した。学生の渡日状況等が学期ごとに異なったため、2020 年春は、Moodle と Zoom を組み合わせた「遠隔同期型」、2020 年秋は Moodle による学習を基本とした「遠隔非同期型」の授業形態[注2]をとった。

2. 目的

本発表では、これら２つのタイプの遠隔授業（同期型、非同期型）において、言語教育の授業におけるインタラクションを含む学習活動をどのように実現したかを、Moodle の

ログ解析、教師による授業報告、学生へのアンケートをもとに分析・考察し、遠隔授業における言語教育・学習の可能性と課題について述べる。

3. 方法

2020 年 4 月から 2021 年 2 月にかけて金沢大学の全学向け日本語プログラムの日本語科目を履修した学習者の LMS 上の学習状況と学習終了時のアンケート、および授業を担当した教師（25 名）による授業報告および遠隔授業切り替え前の 2019 年秋の対面授業の学習状況と報告をもとに、対面から遠隔への授業形態のシフトに伴い、授業での言語学習活動はどのように行われたか、それに対する学習者および教師からの反応がどうであったかについて、分析・考察した。

4. 結果と考察

4.1 学習モジュール・タイプの量的分析

対面から遠隔への授業形態の変化に伴い、従来の学習活動がどのようにシフトしたかを、LMS 上の学習モジュール・タイプから分析した[注3]。その結果、遠隔授業切り替え前は、学生が直接取り組む活動のうち「課題」「小テスト」「フォーラム」と教師が生徒に提示するリソースのうち「ファイル」「ページ」が使われているのみで、モジュールの数も種類も数も少なく、それも一部のクラスでの利用で、対面授業の補助的な利用のしかたが主であった。しかし、すべてのクラスの授業形態が急遽遠隔同期にシフトした最初の学期である 2020 年春には、利用される学習モジュールの数もタイプも飛躍的に増え、総合日本語プログラムの全科目の LMS 上で作成された学習モジュールは、コロナ禍以前の 2019 年秋が 689 個であったのに対し、2020 年春には 3918 個にもなっていた。特に、「課題」「小テスト」といった活動や、教師が学習の指示や解説を提示するための「ファイル」「ページ」「URL」の数の増加が顕著であった。2019 秋（対面）から 2020 春（遠隔同期）へのシフトでは、多くのクラスでは、学生の理解度の確認や学習内容の定着を確認するような課題は、LMS 上の「課題」で行う、また繰り返しての練習が必要・有効なタイプの学習活動は「小テスト」などで行い、限られた遠隔同期の時間を、zoom 等を用いての口頭のやりとりの学習活動に充てたクラスが多かった。2020 春から 2020 秋（遠隔非同期）へのシフトでは、学習モジュールの数は対面からのシフトの時ほど急増はしなかったが、それでも 3918 個から 4128 個に増加していた。特に増えたのは、学生の理解を確認するための「課題」や「小テスト」や、遠隔同期の zoom セッションで行っていた口頭での練習の代わりに学習者の発話を音声ファイルにして提出させる「録音課題」などであった。

4.2 学習モジュール・タイプの質的分析

これらの学習モジュールが、特に対面授業時におけるどのような学習活動を代替しているかについて、質的に分析した。対面から遠隔のシフトにおいて、複数のクラスで多く利

用された学習モジュールは「フォーラム」で、フォーラム上にテキストでの意見交換はもちろん、音声ファイルや、学生のプレゼンテーション動画を投稿し、それを視聴したコメントを相互に投稿するなどする活動も行われていた。このような学習モジュールの活用により、場所の違いや時差があっても相互作用的な言語活動が実現できた。これらの学習活動の中には、学習者が意欲的に参加し、学習者間のインタラクションが日本語で活発に行われたものもあった。中には、従来の対面授業では実現しにくかった学習活動が LMS 上で効率よく実現できた例など、LMS 上の活動モジュールの特性を生かし、これまでの LMS 上のコンテンツ利用にはなかった新たな形のインタラクティブな学習活動が観察された。また、2020 秋（遠隔非同期）では、インタラクションの機会がどうしても減るため、会話を学生が録音し「録音課題」として提出したものを教師が聴いてフィードバックする、という課題を新たに設けたクラスもあった。これにより即時的なインタラクションではないものの、音声的な産出とそれに対するフィードバックを行うことはできた。

4.3　学習者の反応

このように遠隔へシフトした授業について学習者に学期終了時にアンケートを実施し、LMS 上の学習コンテンツについて学習の役に立ったかたずねたところ、「たいへんそう思う」「そう思う」をあわせた回答が、2020 春（遠隔同期）が 96%、2020 秋（遠隔非同期）が 93%であった。対面授業だった 2019 秋での回答が 90%であったことから、今回の遠隔授業の形態であっても、日本語の授業に対する学習者の満足にはおおむね応えることができていたことが確認できた。一方、この授業を受けて日本語が上達したと思うかについては、2019 秋（対面）、2020 春（遠隔同期）の場合は、「とてもそう思う」が 50%を超えていたが、2020 秋（遠隔非同期）ではこの回答が 50%を若干下回ったことから、遠隔非同期の学習では、学習者が今一つ自身の日本語力の上達を感じられなかったことが窺われた。一方で、学習者からは課題の多さなど、遠隔授業での困難点も挙がった。今回の遠隔授業へのシフトは、限られた期間で急遽行った ERT [注4] であり、特に学期開始時は当初予定していた対面授業の内容を遠隔でできるだけ損なうことなく実現しようとするあまり、十分に学習活動の量や形式を調整することができず、結果的に学習者にとって負担感の多い学習が続くような場合も生じたものと思われる。

4.4　教師の反応

学期終了時に、授業を担当した教師がまとめたクラス報告の記述から遠隔授業に関するコメントを抽出し分析した結果、遠隔授業を行う上での困難点や戸惑いもいろいろと挙げられた。最も多かったのは、学習者の日本語力を正確に把握することの難しさと、学習者が何をどこまで理解しているかの確認の難しさについてであった。学習者の日本語力については、クラスによって、学習内容の理解と定着には対面とさほど違いを感じなかったという所見もあれば、口頭でのやりとり面においては、例年に比べて低いという所見もあっ

た。上述のように LMS 上の学習モジュールに工夫を凝らした学習活動も見られたものの、遠隔授業において相互作用的な活動や能力を育成する難しさについてコメントもあった。学生の理解の把握については、特に遠隔非同期において、文字だけの指示では限界があるといったコメントや、教師のフィードバックを学生がどこまで理解しているかわかりにくいといったコメントもあり、学生との意思疎通の難しさが浮かび上がった。また、従来の対面授業では難なくできていた、学生同士の人間関係構築や学習の仕方も含めた相互の学び合いの機会の創出が遠隔授業では難しかったことについての指摘もあった。

5. 課題と展望

今回の遠隔授業へのシフトは、図らずも従来の教室場面での言語教育を振り返り、その意義や効果について改めて検証する機会になった。特に、教室場面での教師の役割やインタラクションの教育的役割、学習者間での学び合いやラポール形成などについても改めて考えさせられることが多かった。コロナ収束後の対面授業に再び戻った際には、今回の遠隔授業での経験や蓄積を十分に活かし、教室活動と LMS での自律的学習をうまく組み合わせた、より効果的で意義のある学習活動の実現ができるものと考えている。

注

1） 以下、2019 年度秋学期（対面授業）を「2019 秋」、2020 年度春学期（遠隔同期）を「2020 春」、2020 年度秋学期（遠隔非同期）を「2020 秋」と称す。

2） 本発表では、遠隔同期（Synchronous Online Learning）とは、決められた時間に教師と学習者が web 会議プラットフォームなどを用いて即時的にやりとりをしながら学ぶ形態、遠隔非同期（Asynchronous Online Learning）とは、LMS 上にあらかじめ学習コンテンツや講義動画などが用意されており、学習者が好きな時に自分のペースに合わせて学習を進める形態とそれぞれ呼ぶ。

3） Moodle の各コースのレポートに表示された活動とリソースの数を集計した。なお、Moodle 上の学習コンテンツとなる各種機能の詳細については、https://docs.moodle.org/310/en/Managing_a_Moodle_course（2021 年 6 月 25 日参照）を参照のこと。

4） 平時における「計画された」遠隔授業と、今回のパンデミックの状況下のように急ごしらえでせざるを得なくなった遠隔授業とを区別し、これを Emergency Remote Teaching（緊急遠隔授業）と呼ぶ。

参考文献

深川美帆. 2021.コロナ禍における総合日本語プログラムの遠隔教育－国際交流と言語教育を止めないための試み― ，『国際機構紀要』 (3) , 73 - 89 . 金沢大学国際機構.